

有森信二

夏美との約束の時間は、六時だった。ところが、四時近くになって、得意先から大量の注文が入ったため、急いで在庫をチェックし、伝票を配送係に回し終えたのが、六時前十分になっていた。

約束の場所である天満駅構内のプレイガイド裏まで、最初は地下鉄で行くつもりだったが、小走りで駆けても十分は掛かる最寄りの駅までの距離を考えると、時間までに着くのは絶望的なことだった。

エレベーターを下りながら、時間のことには特にうるさい夏美の、こんなときにしきりに左指で前髪を掻き上げる仕草を思った。

会社の玄関を走り出たところで、ちようど通り掛かったタクシーの運転手と目が合い、僕は誘われるままに乗り込んでしまった。それが失敗だった。いくらも走らないうちに、タクシーは渋滞に巻き込まれ、一メートル進むのに五六分も掛かるありさまになった。地下鉄でなら、せいぜい十五分くらい遅刻で済む筈だったのに、今日の自分はずくづく付いていないと思った。

昨夜遅く接待麻雀で疲れて帰ったのだったが、今朝の五

時に間違い電話で起こされたのがケチの付き始めだった。それに、十一時に会うことになっていたロード社の係長が、直前になって時間と場所を変更してきたため、昼食のセットをしていた料理屋のキャンセルをする羽目になり、おまけに、絶対確実と思っていたOA機の契約が不成立に終わってしまった。そのことで、課長にさんざん怒鳴られ、新機種プリンタの販売チーフを、同僚の中島に交代させられたのだった。もっとも課長の機嫌の方は、かねがね売り込みを続けてきた西海銀行から、十二時に一挙に五十台ものパソコンの注文があつたため、ものの三時間足らずで快復したのだったが。

僕は、いっこうに進まない車の中で煙草に火を点けた。腕時計を見ると、六時二十五分を指していた。夏美の、いつもの緑色のマニキュアが目先にちらついていた。僕は煙草をゆっくり吸った。こうなったら、じたばたしてもしょうがないという気持になり、ほんの今までいったん車を降りて、もう一度地下鉄に戻ろうと考えていたことが、ひどく滑稽なことに思えてきた。

いっこうに進まない車のガラスに、ネオンが何度も散り掛かった。それらの殆どは、車やカメラや薬品の広告であり、薬品のネオンの向こうに、小さな三階建のホテルのネオンが見えた。それは、夏美と何度か入ったことのあるホテルだった。

夏美とはしばらく会っていない。会っていないというより、ぼくの方で避けてきた。その間、夏美からは会社やアパートに何度も電話が掛かってきたのだったが、その度に僕は断った。

実際この三か月ばかりは、決算期を控えての残業続きで、時間が殆どなかったし、休日も仕事で詰まっていた。夏美はプライドの高い女だから、そんな僕の会社の帰りや、アパートの出掛けに待ち伏せするという事はなかったが、電話だけは度々掛けてきた。

夏美の用件は察しがついていた。どこか遠くへ、連れ出してほしいのだった。これまでも光円寺の石庭、浜公園の夜桜、秋山城址などと、夏美の住むアパートからできるだけ遠く離れた郊外を歩き、ビールを飲み、その後で激しく体を重ね合ってきた。

信号が赤に変わった。タクシーはやつとのことで、交差点の直前まで来たのだったが、あと一息でラッシュユを抜けるというところで、また進路を阻まれてしまった。僕は、二本目の煙草をくわえた。

歩道にあふれていた人の群れが、いつせいに交差点を渡り始めた。どこから湧いてきたのか、それは目を瞞るほどの数だった。それらが、押し合い、ひしめき合いながら、それでいてどこか緩慢な歩みで、いっばいに広がって渡っ

ていく。疲れたネズミの大群に似ている、と僕は点けたばかりの煙草を灰皿で揉み消した。

コツンと、タクシーのボデーにぶつかってきたものがある。ぶつかるといよりは、よろけ掛かってきたのであるが、それは、ネズミの大群から弾き出されたとても形容すべき、瘦せぎすの女だった。

「何だよー、ぶつかって一言の挨拶もないのかい」  
女はボンネットの前に立ち塞がり、ドウンと車体を叩いた。手にはたいした物は持っていないようであるので車に傷は付かないものとみえるが、前に立たれたものでは車は動けない。女の髪は、顔が覗き込めないほど量が多く、埃に汚れ、けばだっている。

運転手が降り、女に歩道に上がってくれと頼んだ。

「てめえ、ぶつかってにおいて、説教までやらかそうてのかい」

女は髪の奥に小さな顔があり、目を引きつらせて叫んでいるが、案外小綺麗な顔立ちをしているのだった。年の頃は、二十を越えるか、越えないぐらいか。

「この車は、もう十分間も動けないでいる。ほら、この大渋滞だ。動きもしない車が、どうして君にぶつかれると言うんだ」

運転手は、女の手を引き、傍の歩道に上げようとした。女は拒んだ。猫が敵を前に身構え、攻撃の隙を狙っている

という図だ。

「これを見る」

声が暖れている。

女は腕をまくり上げ、左肘に出来た痣を運転手に向かつて突き出した。硬いものに打ち付けたらしく、三センチぐらいの赤い傷があり、うっすらと血が滲んでいる。

運転手は、腕組みをし首を捻りながら、「今も無線で警告がなされてるんだよ。最近、若い女の当たり屋が、この界限で日に何度もトラブルを起こしているんだとね。そこどいてくれないと営業妨害だよ。悪いことは言わんけどね」と苦々し気な早口になる。車が動かないでイラツイているところに、法外な金でも吹き掛けられたらたまったものじゃない。

「話をすり替えるんじゃないよ。現に今、こうやってぶつけられたんだ。ほれ、見ろ、血だ。ボンネットの角でガツンとね」

女のまくった肘は、一捻りすれば折れてしまいそうな細さである。

「若い女。痩せ形。髪が長い、と無線では繰り返し知らせているし、警察の方にも知れてるんじゃないかねえのか」

運転手は、しばらく女の耳元近くで何事かを囁いていたが、「それで、どうだ」と女に念を押すと、「申し訳ないですが、事故ってしまいましたので、ここで降車いただく

わけにはいきませんか。事が事なもんで、あい済みません」とドアの外から僕に話し掛けてきた。

僕はこの女のことをしばらく見ていた気になっていたが、運転手の言い分もともだと思つた。メーターは千五百円を回っていたが、千五百円でいいからと急かすふうである。言われた額を渡し、車道側のドアを開けて降り立つと、入れ替わりに女が乗り込み、ちょうど信号が変わつたこともあり、そのままタクシーは交差点を突っ切つて行った。

何なんだよ、と呟いた僕は、あれは新手の客引きなのかもしれないと思つてみた。どちらがどんな目的があつて取引をしたのか知らないが、そんな手もあるのかと感心し、女の痩せた胸に薄い乳房が小さく揺れる様を思つた。

やはり地下鉄にしようと、階段を下りかけたところで、携帯が鳴つた。

「一度しか言わないよ。後十分したら、帰るから」

夏美だつた。三十分も待たされイライラが積もつた声だ。「済まない。車が渋滞して進まない。今から地下鉄に乗り換える。後、二十分待つてよ」

「ダメ。今言つたとおりだわ」

夏美は、僕がさらに言い掛けようとするのを待たずに、切つてしまった。いつもこうなのである。

僕は地下への階段を走り下り、乗り場に急いだ。階段下

は足をとられやすい材質になっており、滑らないようスปีドを落としながら急ぐ。少し歩を進めると、リノリュウムの床になっている。

床を走った。ちょうど電車が到着したばかりとみえ、改札は満員の状況だった。

満員電車に飛び乗った。汗の臭いが車内に籠もっている。僕の首筋にも、汗が噴き出してくる。後十八分。七つ目の駅に辿り着くだけで、二十五分はかかる。都合、一時間の遅刻である。

天満駅のエスカレーターを二段ずつ駆け上がった。

駅構内に出た。待ち合わせ場所であるブレイガイド裏の花屋の前に走り寄った。

夏美の姿は見えない。花屋の周囲を見回し、コンコースの端から端まで歩いた。いない。

コースを改め、もう一度花屋の横手に回り込むと、夏美の後ろ姿が見えた。

「済まない、ごめん」

夏美は眉を蹙め、口を尖らせている。容易なことでは済ませないことになった、と長い間の勘でそう思う。

「一時間以上の遅刻だわね。先ほどの電話の期限からも、もう十分以上だよ。亮介の気持がわからない」

「途中のタクシーがまずかった」

「どうでもいい。それでも何故、十分以上も待っていたと

思う」

「いいお店を見つけた、とか」

「話にならない。先のこと、この時間に賭けたの。ギリギリで駆け付けてくれるなら、田舎には帰らない。だって、三か月ぶりですよ」

「でなければ」

「駆け付けなかったら、後は知らない」

「尋常ではないな、でどうしようっての」

夏美は、僕の顔を睨み付け「渋谷寺の後を継ぐ、ってことになるのだけは嫌だ。いざというときには、いつも亮介は逃げてしまうんだから」と、睨め上げる。

「言い掛かりだろ。僕だって仕事を懸命に片付けて、まだみんな頑張ってる中を抜けて来た。精一杯のところなんだ」

「言い訳になるわ。それ以上聞きたくない。今日は自分の運勢を占う大切な日だった。私たち、これで幸せに向かっているんだろうかと、悩んだ上でのことよ。でも、こうなること、どこかで薄々感じてたわ」

夏美はそこまで言うなり、二人に向かつてきた人の流れの中に歩み入り、あつと言う間に距離を作った。人の流れを掻き分け追い縋ろうとしたのだが、黄信号の中をそのまま早足で去って行く。携帯の呼び出しにも出ないし、次の角を路地に折れ込んでしまった。

夏美は、これまで何度こんな態度を繰り返してきたことだったか。待ち合わせに遅れたり、評判を聞いて訪ねて行った料理が気に入らなかつたりすると、決まって「どうしてこうなるの」という言葉を吐いた。

僕と夏美は高校まで一緒に、大学は別々だったものの、「田舎臭いよね、私たち」と言う癖が抜けないのだった。

僕の実家は農家で、夏美の実家は寺だった。どちらも最初の子、つまり長男であり長女であった。しかも、一人っ子というところも似ていた。

夏美の方は、寺の娘として自由に育てられ、そろそろ適齢期であるということでの焦りも感じられた。夏美自身、一応仏教系の正見大学で基礎は修得しているのであるが、僕たちの田舎では女性が住職となつて例はなく、当人もこれ以上の修行に励む気にはならないらしい。

ただ、僕と夏美がこのままの関係が続けていては、寺の後継ぎにはなれないし、僕が家に戻ることが万一あつたとしても、寺の養子になることはまずあり得ない話だった。

「連れて逃げてよ」

夏美はことごとくそう僕を誘つたのだが、僕の方も田舎を遠く離れて住むには吹っ切れないものがあつた。

「どっする」

「なるようにしか、ならないのねえ」

体を離して仰向けになると、最後には決まって同じ台詞

になつた。

そんなとき、僕の頭の中にはいつも、夏美の白い体を組み敷く、太り肉の僧侶の浅黒い顔が浮かんだ。

高校卒業後の二十歳の同窓会は、市内の小料理屋で行われた。三年前のことである。

籤で席を選んだ僕は夏美の近くになり、声が届く距離で、「何だ、お前かよ」と声を掛けたのだった。高校三年の夏のキャンプで夏美と親しくなつた僕は、市内の大学に入學しても頻繁に行き来していた。

酒が回るにつれ、座が崩れ出し、僕自身末広たちと輪を作っていたが、夏美の前を離れない男がいるのに気を留めていた。

高校時代はあまり目立つたところのない垣内で、青く刺り上げた頭から見て、仏教系の大学に進んだものらしい。

「奴は寺の二番目か三番目なのに、やっぱ坊主になるんか。京都の大学だという」

「坊主の傍ら、教職に就いたり、町役場の職員になつたりする者もいる御時世だからな」

誰かがそう言っていたが、その時はまるで気にも留めなかつた。

「夏美も寺の一人娘だよな」

と言う声がしてすら、僕の頭の中に垣内と夏美が同じ線

上に並ぶことはなかった。その実、向き合った二人の間には笑顔も嬌声もなく、垣内がいるというだけで、それこそ湿っぽい空気を否応なく漂わせていた。

「二人は、これ以上ない組み合わせかもな」

剽軽者の末広がりが大声で揶揄してさえ、僕には気の利いたジョークに聞こえたのだった。

「最後の相談になるかも」

夏美からメールがあった。自分の運勢を占う大切な日だったという日が過ぎて、五日が経っていた。前回のことが頭にあり、「七時ではどうだろう」と返すと、分かったという簡単な返事だった。

僕は会社を六時に出、真っ直ぐに地下鉄に向かった。地下鉄は空いていた。椅子の端に腰を降ろし、最後の相談とは何だろうと考えた。夏美の実家には住職の父と、母しか残っていない。夏美は大学を卒業したら、田舎には戻らないという約束だったようだ。

しかし、子供は夏美だけなのだから、もし寺を継ぐとしたら、自身が僧侶になるか、僧侶を養子に迎えるしかない。

「そのどちらも、嫌なのよ」

夏美とは七年の付き合いになり、僕も夏美の実家の寺に何度か遊びに行ったことがあるので、住職の父も母も見知っている。二人とも五十半ばである。夏美が生まれたのは、

母が三十の歳だったという。

「遅くに授かったため、甘やかしてしまいました。だから、我が儘な娘になりました」

夏美を一回り小さくした、夏美によく似た母はじつとしていることがなかった。掃除、洗濯、買い物と、やることは普通の主婦と同じですよ、と愛想良く笑った。甲高い声の通りが良くて、ここだけが夏美と違うところだった。

「お寺とは縁のない町方から嫁いで来たので、面食らうことばかりで」

母は笑顔の目立つ人で、言葉はいつもさり気なかった。「夏美が嫌がっているのを、どうしたものかと思えます。私自身でさえ、今選べることなら、この傭の中に留め置かれることから逃れ出て、夜逃げするかもしれませんね」

母は、「和尚は、夏美が帰って来るまで待つと言ってるんですが」と、本堂の方で題目をあげているという父の方を窺いながら言った。

僕は、夏美とともに早々に寺を抜け出し、浜沿いの道に出ると、百キロ近いスピードでバイクを走らせた。

花屋の前に夏美は立っていた。ファッション雑誌を小脇にし、空調の吹き出し口を避ける恰好でウィンドウを覗き込んでいた。

「待った」

「今来たばかり。今日は、なんと時間前じゃない。珍しいわね」

「あまり脅かすからだよ。最後の相談だなんて、大仰な。腰が引けちゃうよ」

「そうかな。とても真剣なんだ、私」

僕たちはこみ入った話をするときによく行く、喫茶店に入った。店内が広くて、いつもゆったりしたバックミュージックを流しているスワンという店だった。奥の方に席を取ると、入口の方からは見通し難い位置にあり、席と席の間隔もゆったりとしていた。

「モカでいいかい」

夏美は頷いた。

「どうかしたの」

夏美の視線が泳いでいる。口元も力なくうつすらと開けたままである。痛性でもある夏美にしては、心ここにあらざるの態である。

「亮介、怒らない」

「いきなり何だよ」

「垣内君とき、偶然、会ったんだ」

「彼、田舎に帰ってるんじゃないかかったの」

夏美は、僕の目を怯えた表情で見詰めた。強く首を振る。

「出来ちゃった、子供」

「え、まさか」

夏美は横に首を振った。

「垣内との、そうなの」

夏美は小さく頷いた。先日人混みに紛れ込んだときの用件も、このことだったらしい。

「垣内は知ってるの、何で垣内の子供だってわかってるの」

「彼は知らないわ。二か月半ほど前、久しぶりに会った。

食事して、お酒飲んで、お寺のことなんか話して。で、何故だかわからないけど部屋に誘ったの。何か、こうなることを頭のどこかで想像してたみたい」

「まだ、間に合うんじゃない」

「駄目だ。殺せない。ちゃんと生きてる。そんなこと、考えられない。もう引き返せないわ。でも、私がこんな女になるなんて」

夏美は、涙を頬に伝わせながら、ハンカチを当てようともしない。涙の数滴が、モカのカップに落ちる。トレードマークの、緑色のマニキュアはしていない。

「で、僕が何をすればいいの」

夏美は目を閉じ、なおも首を振り続ける。左の手を腹部に置き、「どうすればいいと思う。何か喋ってよ」と詰め寄る。

こんなことを僕に相談されたって、まともには答えられないではないか。垣内と夏美の間の問題であるのだ。

「夏美はやっぱり、田舎のことを意識してるんだ」

「わからない。違うと思ってる。だけど、そう思えば思うほど田舎が追い掛けてくる」

「だよな」

「父にも母にも、もう帰らないからって宣言した。七年前ちようど亮介に出逢った頃。マスコミに進むつもりで国立は、門を開いてくれなかった。結局、仏教系の正見大学にしか入れなかった」

「家の方では何と」

「父も母も、帰れども帰るなとも言わない。何も言わない。だから、不気味なんだ」

僕の方は、もの心付いたときから、ことある毎に、家に残らねばならないと半ば命令調で言われてきた。後を見る者がいないと、山地や田や畑を、荒れるにまかせるようになる。数代前から引き継いできた大切なものを、放っておくわけにはいかないだろう、と言うのが親の主張だった。

しかし、僕は強引に家を飛び出している。これだけで、親との縁を切ったことにはならないのだが、狭い田畑を耕作するだけではとても生活は成り立たないし、田舎には仕事らしい仕事がない。教員の仕事はガラではないし、町役場の職員にも有力者の子供しか入れない。農協も漁協もそうだし、もし入ったとしても有力者の言いなりのまま、田舎の狭く暑苦しい空気に耐えねばならない。

「夏美は帰らないと言ってただろう。寺の後を継ぐのはまつびらだつてね。女でもあるし」

「中途半端に期待させたのかもしれない。スベリ止めに受けた正見大に入ったりして」

「昔のことはおいて、今どうしたいんだよ」

「この子は、生む」

「生んでからどうする」

「働かなきゃならない。でも、今の仕事は一度辞めることになるわ」

「知らせないのか、田舎に」

夏美は涙を零していた目をキッと見開き、唇を噛んだ。

「亮介の子なら、考えがつくんだけど。でも、そうじゃない」

「垣内の子だとどうしてわかる」

この台詞は僕にとつて危険なものかもしれないと思いつながら、口にした。もつとも、僕の脳裏をいつの頃からか過ぎるようになった、太り肉の僧侶の背中が夏美の白い肌を覆う様が、目の前を塞いでいる。

「わかる」

「わかるのか」

「亮介とは三か月以上会っていない」

「僕の子であつてくれ、という願望があつた訳だ。もしそうだったら、どうなつたらう」



「そうよね。もし亮介の子だったら、この街からも、田舎からも、ずっと離れたところに一緒に逃げてほしかった」

「垣内の子を生んで、どうしようと考えてる」

「そのことなの」

「僕に相談つての、筋違いじゃないか」

「せめて、意見ぐらい聞かせてよ」

僕には、夏美という女が、これまで僕の腕の中にいて、さんざん我が儘を言ってきたあの夏美ではなく、一個の確とした母なるものに移り行こうとする前の雛鳥に見えてきた。

「この流れに従うとすれば、夏美が田舎に帰り、配偶者として垣内を迎え、子を生み、ゆくゆくは垣内が住職になり、寺を継ぐとも言つてやればいいのかな」

「酷い言い方よね。私の願ってきたこれまでの気持など、全て無視なのね。誰かの書いた筋書きに、そっくり沿つて行け、という訳ね」

夏美が絶対田舎の寺には帰らない。ザワザワした檀家相手の生活など、考えるだけで憂鬱になるわ、と言つていたのを知っている。

しかし、何がどうなつて、垣内を迎え入れることになつたのか、そこから僕にはわからない。三年前の同窓会の席で、二人が笑顔一つ見せずに向かい合つていたのを見た以外には、冗談の端にも出てこなかった。

「夢にも思わないことだった。彼と出会つたのは全くの偶然。駅に向かう用事が出来、電車が入るのを一人待つてたの。最後に降りてきたのが彼。いったい誰だっけと考えたくらいよ。光るほどに剃り上げた頭の形で、垣内君だとわかつたぐらい。それで、挨拶して別れたのよ」

夏美は冷えたモカを一口啜り、ハンカチで涙を押さえた。僕たちが座つた席は庭園に面していて、ピンクの芙蓉が陰り始めた陽を受け、軽やかにそよいでいた。

「雨が降ったり止んだりする日だね、ホームの向こうに遠ざかる垣内君の背中を眺めていたら、なんだか胸がぎゅつと詰まつてきて、あわてて追い掛けたの。それで、息を切らして追いつき、言葉を掛けた。傘は持つてるのつて」

夏美は庭園の向こうに視点を移し、「何かね、何かこう、知らない強い力に操られていくようでね」と呟く。

夏美と別れると、いつもそうするとおり、陽が落ちてもうつすらと明るさの残る歩道を歩いた。地下鉄の駅の三つぐらいの距離は、平気だった。

「また電話するから」

別れ際の夏美は、今までとは違い居酒屋に繰り出そうとは、言わなかった。まだ膨らみのない腹部を両肘で庇いながら、人混みを避け、交差点手前の停留所から、アパートに直行するバスに一人乗り込んだ。

僕の出る幕なんかじゃないよ。何度そう言おうとしたことか知らない。

「それでいいんじゃないか、こんな動かしようのない大きな口実でも見付けないと、田舎には帰れないのさ。いい世話女房になるのかもしれないぜ。もつとも、我が儘で融通のきかないところはそのままで」

「わざわざ呼び出しやがって。勝手に、上手く転がしてやるじゃないか。となると、正見大学に行ったのも、無駄ではないだろう。田舎に帰るなど、絶対嫌と叫んだりしていながら」

僕は、歩きながら伝法な調子で自分に言い聞かせた。

地下でビールでも飲んで帰ろうと、交差点を渡り終えたところで、「てめえ、この傷どうしてくれる」という聞いたことのある女の声に立ち止まった。歩み寄ってみると、運転手を前に、髪の縮れた女が叫んでいる。

「お前が勝手にぶつかってきたじゃないか。止まってたんだぞ。信号は赤だ。長いんだよ。最低二度は変わるのを待たなければ、渡れないんだよ。わかるかい。見なよ。どの車が動いてるんだ」

「てやんでえ、人にぶつかっておいて、それがお前の言いぐさかよう。折れてるかもしれん。手が上がらん。見ろよ。よく見ろ」

あの女だ。髪の奥に小さな顔があり、目を引きつらせて叫んでいるが、今風の美形だ。例えれば、ロックの仲間と別れ、たまたま一人街を歩いていたという図だ。

一週間ほど前に見たときは黒髪だった筈だが、今は赤紫色に近い。

「冗談はやめろ。俺は急いでるんだ。納品の時間はとつくに過ぎ、相手を待たせてるんだ。こいつを屈けないことは、この街の死活問題になるかも知れんて」

「お前の事情など知らねえよ。だったら、出るとこに出てもらおうじゃねえか。話は簡単だ」

沸き立つほどの汗を噴き出させ、気短かそうな三十代の男は、車から降り携帯を取り出した。

「待ちな、百十番が先だ。もう呼んである。ここに向かって来るところだ」

顔色を変えた男は「貴様、常習犯だな。仲間がいるんだろう。覚えておくがいい。後で吠え面かくんじゃないぜ。俺の後ろには、この島を取り仕切っているT組がついている」と、女の手を振り払おうとした。

「ふん、T組なんぞケチなチンピラに過ぎないよ。こつちは警察だ。疑ってるのかい、何なら見せてやる」

女は、ポケットから黒い手帳を取り出した。それを見た男は、苦々しそうに顔を歪め、舌打ちをした。

あの女は何者なんだ。僕の頭も何か点滅を始め出した。タクシーのときといい、今も同じ場面だ。

車を車線の端に移動させ、女の後に従い歩き始める、というところも同じである。警察が当たり屋をやるなんて、そんなことがある筈がない。だとすると、先日のタクシーの運転手も、今の血の氣の多そうな男も、女と、多分女の後ろにある組織が、狙いを定めて引つ捕らえた男たちなんだろう。

それにしても、こんなに易々と女について行くということとは、何を意味するものか。

女と三十男は、デパートのあるビルの中に入り、出てこない。しばらく歩道の櫺の下に立って見たが、三十分経つても何も起きず、車道端に止められた車に近付いてくる者もないのだった。

二人の運転手は、かつてある組織に属しており、逃げ出し、普通人の中に紛れ込んだものの、組織の手はどんなことであろうと脱出者を見付け出し、元の場所に連れ戻そうとするのであろうか、などと考えてみたものの、これは一人で作り事に過ぎない。と、自分の考えを笑いたくなくなった。それとも、新種の客引きで、今頃二人は一室で楽しんでる最中なのかもしれない、などと考えてもみた。

いずれにしても、この数日の間に、同じ女が同じ交差点で、二人の男を当たり屋の手口で運転席から降ろし、連れ

去ってしまったということだ。

あるいは、彼らは、特定の結社の連中で、緊急の招集がかけられたのかもしれない。

まあ、そんなところなのだろうか、とでも考えると少しは腑に落ちる気もした。

百数十万人が暮らす街の交差点には、目に見えない種々の糸が張り巡らされていて、その糸の存在が見える者は限られており、同じ色の糸に絡め取られてしまうという仕組みになっているのかもしれないと考えてみた。

結局は、夏美の操る糸と垣内の操る糸とが同じ色であり、当然の如くに、お互いがたぐり寄せたに過ぎないのではないか、と思った。

「自分のことは、自分で始末しろよ」

僕は、夏美にと、交差点でわめいていた髪の長い女にともつかず、低く呟いた。

(了)